

# 野洲川と共に生きる人びと

—— 水害と恵み ——

高 橋 春 成\*

Yasu River and Local People

Shunjo TAKAHASHI

滋賀県の湖東を流れる県下最大の河川である野洲川は、下流域にたびたび水害をもたらす暴れ川であったが、同時に流域の人びとにいろいろな恵みをもたらす川でもあった。ここでは、このような野洲川と共に生きてきた守山（旧野洲郡守山町、現守山市、図1）の人びとの様子を紹介したい。

## I. 新聞報道にみる昭和28年の大水害

今日、野洲川は大規模な河川改修工事を受け、ほとんど水害の心配のない河川に変貌した。そのきっかけとなったのが、昭和28年の水害であった（写真1）。この水害をきっかけに、繰り返される水害の脅威を取り除くために、大改修が行なわれたのである。ここでは、まず、この時の水害の経緯を新聞記事（朝日新聞）によって復元してみたい。



写真1 昭和28年の水害

（田舟を使って救援活動を行う、洲本町）

### (1) 台風13号の上陸

#### ①最初の報道

新聞に台風13号の記事が載ったのは9月23日の朝刊が最初で、まだ小さな記事であった。中央気象台の飛行機観測の結果、台風13号は22日午後沖縄南東900キロの洋上を北北西に向かって進んでおり、本土接近は25・26日頃の予定といった内容だった。この時はまだ警戒を要するような報道内容ではなかった。

#### ②猛烈な台風が発達

ところが同じ日の夕刊には、かなり大きな見出しで、台風が大型台風発達し本土に接近する恐れが出てきたという記事が載った。大阪管区気象台の23日正午の発表として、台風は朝9時に沖縄南東800キロの海上を北に進んでおり、中心示度は915ミリバール、中心付近の最大風速は75

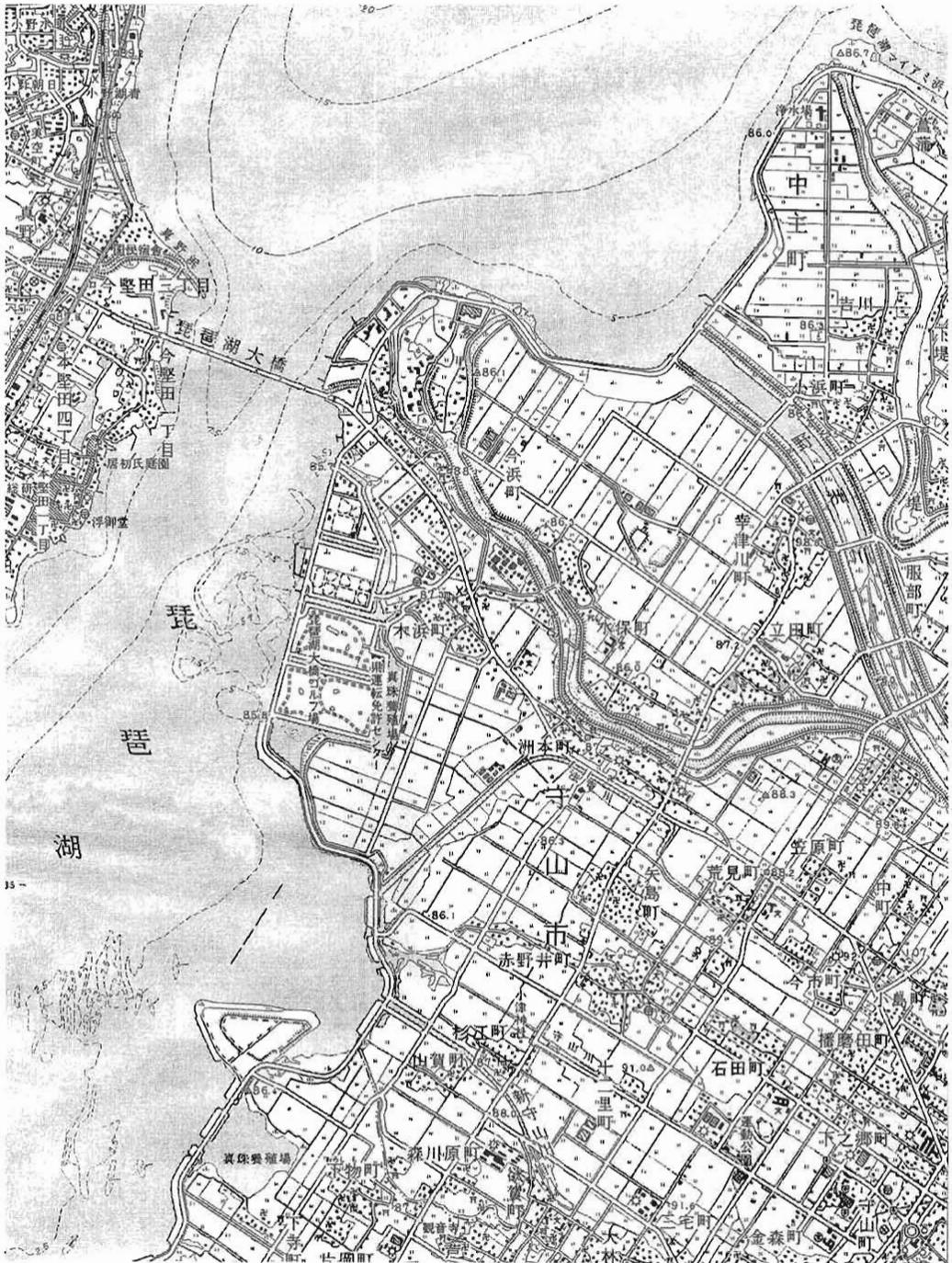


図1 野洲川の下流部  
(河川改修によって、南流と北流の間に新しい放水路がつけられている)

メートルであるという。ここにきて、台風13号が大型の9月台風として警戒を要することが伝えられた。

### ③台風のコースは？

そうなると、次はこの台風がどのようなコースをとるかが最大の関心事となった。報道もそこに主力がおかれた。ところが、台風13号のコースはなかなか予想がつかなかった。

それはその後の報道内容にうかがわれる。まず24日の朝刊に、23日午後9時の大阪管区気象台の発表として、台風が午後6時に沖大東島の東200キロの海上を北北東に進んでいること、このまま北東に進み24日夕刻には関東のはるか南沖に抜ける見込みであること、そして関西にはまず影響がないとの予報が載った。しかし同じ日の夕刊には、一転大きな見出しで、台風13号が本土に迫っており、近畿地方は嚴重な警戒を要するとの記事が載った。観測によると、24日の正午になっても台風は依然として北または北北東に進行していた。予想と違い本土に接近するおそれが出てきたのは、太平洋高気圧が強く張り出し北東に向きを変えるのが遅くなったためと説明された。

### ④いよいよ上陸！

一旦関東沖合に去ると予想された台風13号だったが、徐々に上陸の可能性が高くなってきた。25日の朝刊には、“四国南岸に上陸か、近畿通過の恐れも”といった見出しがおどった。25日午前2時半の大阪管区気象台の発表によると、台風は25日午前零時に室戸岬南方450キロの海上にあり、毎時30キロの速さで北に進んでおり、中心の気圧は915ミリバール、中心付近の最大風速は60メートルとなっていた。強い勢力をたもった大型台風の上陸が間近に迫った。

そして、ついに台風13号が上陸した。25日の夕刊には、台風が25日の午後2時50分ごろに潮岬沖を通過して三重と和歌山の県境付近に上陸し、紀伊半島から伊勢湾を通過して東海地方に向かったとの一面トップ記事が載った。

## (2) 被害の発生と対応

滋賀版にのった記事を通して、野洲川下流域に位置する守山で生じた被害と、それへの対応をみていく。

### ①予想より大きかった台風被害

9月27日の新聞は、台風被害が予想より大きかったことを伝えている。彦根測候所によると、台風がもたらした雨量は県平均172ミリ、台風の最大瞬間風速は29メートルだった。しかし、山間部での降雨量が多かったため、河川の決壊や出水が多発し、それに伴う多大の被害が生じた。野洲川の決壊と出水によって守山に大きな被害が出たのもそのためだった。

### ②泥水の中に孤立

27日の新聞には、26日の朝に河西村笠原など三ヶ所で野洲川が決壊し、野洲川の濁流が玉津村全域に浸水したこと、午後4時現在の水位がなお4尺に達し、電燈・電話とも不通で、隣りの村とは舟で連絡しているといった状況が報道されている。28日の新聞にも、27日午後5時現在の状況として、速野村や玉津村は依然として2尺から3尺の泥水の中に孤立しているといった記事がみられる。

### ③流域住民あげての復旧活動

10月7日の新聞に、水害発生から10日経過した10月6日現在も野洲郡兵主村井口の決壊箇所から濁流が村内に流れこんでいるため、河西村笠原の仮堤防を一応完成した地元民は、6日から井口の修理に全力をあげているといった記事がある。地元住民あげての懸命の復旧活動が各地でくりひろげられた。

### ④求められる対策

9日の新聞には、建設相が野洲川の堤防の決壊現場を視察し、「災害復旧は早急に行なうが、原形復旧に終わらず改良を加えた復旧工事を行ないたい」と述べたことが、また13日の新聞には、県庁の土木部で県下河川の恒久的な改修対策が検討されたことがとりあげられている。決壊・出水する箇所のほとんどが以前に決壊・出水した前歴をもつことから、原形復旧しただけではいずれまた水害が発生する危険性がある。したがって、水害を防ぐためには改良を加えた対策が必要であると考えられた。18日の新聞には、河西村の笠原や速野村の今浜の堤防復旧工事は堤防の中心部に高さ8メートルの鋼鉄の柱を入れ、外側を階段式にして幅の広い堤防に強化するといった計画が紹介されている。

昭和28年の大水害をきっかけに、水害を未来永劫にわたって無くすことを目標とした野洲川改修の動きがでてきた。そして、昭和40年代になって大規模な改修工事が行なわれ、現在の放水路がつくられた。

## II. 水害との苦闘のあと

古くからたび重なる水害を受けてきた野洲川流域には、多くの水害史跡と水害を抜本的になくすために近年行われた野洲川の改修事業を記念する碑がみられる。これらのすべてに、水害を受けてきた人びとの水害との苦闘のあとがしのばれる。

### (1) 水害史跡

水害史跡を分類すると次のようになる。

- ①防災（水害）祈願や水害からの復旧を願って建てられたり植樹されたもの。
- ②水害にあたり殉職した人びとをとむらったもの。
- ③水害対策に尽力した人びとをたたえたもの。
- ④水害対策用のもの。

ここでは、①と②について代表的な水害史跡をみってみる。

- ①防災（水害）祈願や水害からの復旧を願って建てられたり植樹されたもの

〔蜷江神社〕：笠原町（図1）にある蜷江神社の名は、タニシに由来すると伝えられる。享保6年7月に笠原堤が切れ、社殿が流出し御祭神が危険な状態になった時、多数のタニシが付着した御神輿が社前に止まり、幸いにも御神体の流出をまぬがれたと言われている。人びとはこれをタニシの靈験加護のたまものと感謝し、神社の境内に池を掘り、タニシを放ち大切にしてきた。

〔川田の一本松（写真2）と大神宮さん〕：川田町の野洲川左岸には、神木とされたマツの大木（一本松）と「大神宮さん」と呼ばれる祠があった。地元では、川切れ絶無と堤防強化を祈願して江戸時代中期にこのマツを植え、鎮水を願って大神宮を祀ったと言いつた。しかし、このマツの大木と祠は、野洲川の改修に伴って伐採と移転を余儀なくされた。そこで、昭和49年に伊勢神宮よりマツに代わる神木（樹齢3～4年のマツ1本とスギ2本）を授かり、川田町の天神社に植樹し、大神宮を移転した。そして、翌年の昭和50年にマツの大木は伐採された。



写真2 川田の一本松

〔中野樹下神社のカエデの木〕：中野町にある樹下神社には、水害にあった中野の復旧と團結を願って植樹されたカエデの木が3本ある。中野は明治29年の野洲川決壊による水害を受け、上中野の元宮が川底になった。そこで、大正3年の堤防改修の折に上中野の元宮と下中野の若宮を合祠し、現在のところに神社を移した。神社にある3本のカエデの木は、当時の氏子3人が京都御所の修築工事に参加した折に持ち帰ったものである。

〔水災記念碑〕：大正2年10月3日、台風によって増水した野洲川は笠原町で約180メートルにわたり決壊した。その結果、死者32名、流失家屋25戸、浸水面積約300ヘクタールという大きな被害がでた。水災記念碑は、過去の災害を忘れないように、そして過去の経験を生かし二度と悲惨な歴史をくり返さないようにとの願いをこめて建てられた。

②水害にあたり殉職した人びとをとむらったもの

〔城野曹長之碑と奉公袋（写真3）〕：笠原町の順教寺に、大正2年10月3日の水害で亡くなった退役軍人城野清三郎の碑がある。城野氏は、笠原の堤防が決壊した時に老いた母を背負い木綿袋を提げて順教寺に避難しようとしたが、後に残した妻の叫び声に暗闇のなかを胸まで水に浸かりながら引き返し、妻を探し求めているうちに帰らぬ人となった。

夜が明けて発見された時、城野氏は肩から提げた木綿袋を固く握りしめたままだった。この袋の中には大切な書類がぎっしりつまっていた。城野氏はいつも木綿袋に大切なものをいれ災害に備えていたのである。この話は人びとに深い感銘を与え、軍はこれを退役軍人の模範とたたえ、在郷軍人に「奉公袋」として採用し重要品を常備させた。奉公袋は一般家庭でも常備袋



写真3 城野曹長之碑

として普及し、今日に伝えられている。

〔自衛隊災害派遣隊長土手善夫の頌徳碑〕：美崎町に、昭和40年9月18日の台風24号による水害時に殉職した土手善夫一等陸尉の頌徳碑がある。土手氏は、自衛隊の災害派遣隊長として部下32名を指揮し、野洲川の中洲に孤立した今浜新田の人びとを救助する任務にあっていたが、流失した大川橋橋脚を利用して救助索を展架中に部下の危急を救おうとして遭難した。

## (2) 改修記念碑

野洲川の改修に伴う記念碑には次のようなものがある。

〔野洲川改修に伴う集落移転の記念碑〕：野洲川の改修に伴って移転を余儀なくされた川辺集落（守山市笠原町川辺）に、野洲川改修事業が地域の人びとの永遠の幸せに寄与することを願って建てられた記念碑がある。

〔野洲川改修記念碑〕：新庄町に、野洲川改修事業に尽力した元国会議員故宇野宗佑氏をたたえるとともに条件整備の早期完了を願って建てられた記念碑がある。

〔野洲川放水路事業の記念碑〕：新庄大橋のたもとにある野洲川の新放水路わきに、昭和54年6月に通水した野洲川放水路事業と通水祝賀会で披露された野洲川音頭の記念碑がある。

〔野洲川通水十五周年記念碑(写真4)〕：野洲川放水路事業の記念碑のとなりに、通水十五周年を記念して建てられた碑がある。通水後安全な川に姿をかえた野洲川をみて、「野洲川改修事業をやって良かった」との思いで建てられた。

## Ⅲ. 人びとの生活と竹やぶ

野洲川の堤防や家のまわりには、かつて多くの竹やぶがあった(写真5)。これらの竹やぶは、人びとの生活と深くかかわってきた。竹やぶは、たびたび洪水にみまわれた野洲川の堤防を守るために育てられ、地震などの時も竹やぶに逃げ込めといわれたように防災の役割が大きかったが、その他にも人びとに様々に利用されてきた。



写真4 野洲川通水十五周年記念碑



写真5 野洲川の堤防の竹やぶ

## (1) 林産物の供給源であった竹やぶ

表1・2は、守山町と速野村の郷土誌に記録された林産物である。山林がない守山の林産物の供給源は、主に野洲川の堤防の竹やぶや河辺林であった。竹やぶには、マダケ、ハチクを中心に、モウソウチク、ホテイチク、ヤダケ、メダケなどがみられ、竹材、竹皮、タケノコなどが生産されていた。明治44年の守山町の生産額は、竹皮、竹材、淡竹を合わせ162円、速野村の生産額は、竹材、竹皮、タケノコを合わせ308円となっている。この額は、守山町の全林産物の生産額の25%、速野村の全林産物の生産額の81%を占めている。山林がない守山の林産物の生産は多くはなかったが、その中で竹やぶが主要な林産物の供給源となっていた様子がうかがえる。

明治29年の大水害以前の中洲地区では、竹やぶの竹を切って、筏（いかだ）にして流していた。この筏は、下に3束、中に2束、上に1束をのせて竹の皮でくくった（守山市教育委員会、1974）。木浜や安土町の方まで運び、エリや梁、蛇籠などの材料とした。

表1 明治時代の林産物（守山町）

		明治41年	42年	43年	44年
竹皮	数量(匁)	70	130	80	100
	価格(円)	10	13	12	18
竹材	数量(束)	120	80	40	120
	価格(円)	122	88	36	109
薪炭材	数量(束)	143	95	138	126
	価格(円)	500	353	500	490
淡竹	数量(束)	80	20	40	37
	価格(円)	88	16	36	35

表2 明治時代の林産物（速野村）

		明治40年	41年	42年	43年	44年
竹材	数量(束)	100	145	100	100	90
	価格(円)	38	67	55	60	55
竹皮	数量(貫)	27	25	20	15	15
	価格(円)	2	5	4	3	3
下草	数量(束)	1800	2000	1500	1500	1500
	価格(円)	10	30	22	22	22
下駄材	数量(駄)	50	30	25	25	25
	価格(円)	70	51	42	43	50
筍	数量(貫)	—	—	7500	5000	5000
	価格(円)	—	—	375	250	250

## (2) 生活資材や食料などの供給源であった竹やぶ

竹やぶがあった堤防は、区域を区切って周辺の主な家の所有地となっていた。防災用に育てられた堤防の竹やぶは、所有者による手入れが行なわれていた。人びとは、竹やぶの手入れをすると共に、そこから様々な生活資材や食料などを得ていた。

たとえば、手入れのために伐採したり刈り取った竹や雑木、倒れたり朽ちた竹や雑木、落下した竹や雑木の枝葉などは薪（たきぎ）となった。また、洗濯ものを干す竿（さお）やみつまた、稲木（いなぎ）、畑や庭で用いられた竹の手（作物や花などの支柱）、田舟の棹（さお）、竹かごなどの材料、家のかべ下なども竹やぶから入手した。下草刈りも行なわれ、刈り取った下草は家畜の飼料などにされた。

夏になると、落ちたマダケの竹の皮が堤防一面を覆うようになり、人びとは竹の皮ひろいをした。竹の皮は、弁当の包み、魚を煮る時の下敷き、ぞうりなどに利用されていた（富田，1983）。タケノコは、タケノコご飯、みそ汁、てんぷら、煮つけ、つくだ煮、酢みそあえなどとして、各家の食卓を賑わした。家のまわりの竹やぶからも、同様の生活資材や食料などを得ていた。

このような竹やぶの利用は昭和50年頃までみられたが、生活様式の変化と堤防の整地に伴い、現在ではほとんど行なわれなくなった。

### (3) ヨゴミ摘み、スイスイ採り、ツクシ採り、クリ拾い

竹やぶがある旧野洲川の堤防付近では、春はヨゴミ摘み、スイスイ採り、ツクシ採り、秋はクリ拾いなども行なわれてきた。当地でヨゴミと呼ばれる植物は、キク科の多年草であるヨモギのことである。人びとは、ヨモギの若葉をゆでてまぜヨモギ餅をつくったり、若芽や葉をてんぷらにして食べた。また、ヨモギから灸（きゅう）に用いるもぐさをつくることもあった。

スイスイと呼ばれる植物は、タデ科の多年草であるイタドリのことである。茎が中空で節があるイタドリも食用にされた。若茎をゆでてたんざくに切り、酢のものなどにした。ツクシは、トクサ科のスギナの地下茎から早春に生じる胞子茎である。筆（ふで）の形をしていることから、漢字で土筆（つくし）と書く。はかまをとりさって、酢のもの、つくだ煮、てんぷら、煮もの、すまし汁などとして食用にされてきた。

秋にはクリ拾いが行なわれた。所有地に区切られた堤防には、竹の他に食用となるクリの木などが植えられていた。人びとはこれらの実が落ちるのを待ってクリ拾いをした。このようなヨゴミ摘み、スイスイ採り、ツクシ採り、クリ拾いなども、食生活の変化の中で近年はみられなくなった。

## Ⅳ. 野洲川と共に

流域住民にとって、野洲川は古くから水害をもたらすおそろしい川であったが、一方で、上述したように堤防の竹やぶは人びとの生活にさまざまなものを提供してきたし、生活用水や灌漑用水が得られる恵みの川でもあった。まさに、人びとは‘野洲川と共に歩んできた’といえるのであるが、そのことは、流域の人びとがもつ野洲川のイメージからもうかがえる。

流域住民の野洲川のイメージをみるために、旧野洲川南流沿いに位置する洲本町（図1）でアンケートをとってみた。洲本町は、たびたび水害にみまわれてきたが、一方で飲料水や水田への灌漑用水を野洲川から得てきた。野洲川の水害と恵みを合わせて受けてきた洲本町の人びとの野洲川に対するイメージをみることによって、流域住民の野洲川に対するイメージの概要がわかる。

アンケートは、洲本町の116人の方々から回答を得た。116人のうち、男性は65人、女性は51人である。10才未満から90代まで幅ひろい年齢層から回答を得た。アンケートでは、“「野洲川」と聞いて連想し思いうかべる言葉をできるだけ多くあげてください”という質問をし、回答された言葉を分類した。これらの言葉の分類によって、人びとがもつ野洲川のイメージをみてみる。

なお、野洲川に対するイメージは、水害体験の有無によって違いがあると考えられる。洲本町では、昭和28年の大水害を最後に目立った水害を受けていないので、40代以上の水害体験者とそれ以外の水害を体験していない者に分け、それぞれのイメージをみていく。

### (1) 水害を体験した人びとのイメージ

水害を体験した人びとのイメージを表3に示した。表には、3回以上の頻度で出てくる言葉あるいは言葉群が示される。表をみると、まず水害に関するものが多く、野洲川のイメージが水害と強く結びついていることがわかる。

しかし一方で、野洲川の恵みに関するものも多くみられる。その内容は、生活用水や灌漑用水としての野洲川の水の利用にとどまらず、野洲川や堤防での魚とり・虫とり・野ウサギ追い、水泳・水遊び、遊び場・石ひろいと多様である。水害を体験した40代以上の人びとの時代は、野洲川が生活の中に幅ひろくかかわっていたことがわかる。

恵みに関するものの頻度を合計すると98になり、水害に関するものの頻度108とはほぼ同じになる。人びとが野洲川を“暴れ川”とイメージするとともに“恵みの川”としてもイメージしていることがわかる。この世代の人びとは、まさに‘野洲川と共にあゆんできた’のである。

### (2) 水害を体験していない人びとのイメージ

水害を体験していない人びとのイメージを表4に示した。表には、3回以上の頻度で出てくる言葉あるいは言葉群が示される。表3にくらべ水害に関するものがたいへん少ない。また、野洲

表3 水害を体験した人びとの野洲川イメージ

	言葉や言葉群	頻度
水害に関するもの	暴れ川・暴れ太郎・台風・大雨・決壊・洪水・水害・避難・おそろしい	108
野洲川の恵みに関するもの	恵みの川・美しい井戸水・飲料水・川により生活できる・取り池・田畑に恵み・母なる川	19
	魚とり・築(やな)・投網・ハス・ウルリ・アユ	37
	虫とり・カブトムシ・クワガタムシ・野ウサギ追い	13
	水泳・水遊び	23
	遊び場・野球・探検ごっこ・石ひろい	6
野洲川とその周辺に関するもの	天井川・竹やぶ・堤防・川原・三角州	43
河川改修とその後の野洲川に関するもの	河川改修・新放水路	6
	いかだ下り・ファミリーマラソン・河川敷スポーツ	4

川の恵みに関するものも少ない。表4の言葉あるいは言葉群の頻度の合計は105で、表3の合計である259に比べずいぶん少なくなった。これらの数字をそれぞれの回答者数（表4は51人、表3は65人）で割って一人当りの頻度を出してみると、前者が2、後者が4となる。「野洲川」と聞いて連想するものが半分になっている。

これは水害体験がないために水害にかかわる野洲川のイメージが少ないためであるが、原因はそれだけではないようだ。昭和28年の大水害後の高度経済成長期に人びとの生活スタイルが大きく変化し、生活の中における野洲川との多様なかわりが少なくなったことも原因にあげられる。近年は、水害を受けなくなったことと生活の中での多様なかわりが少なくなったことで、人びとにとって野洲川は遠い存在になりつつある。そのような中で、野洲川に対する生活に密着した具体的なイメージは少なくなり、“大きい”や“のどか”といったイメージが多くなりつつある。

表4 水害を体験していない人びとの野洲川イメージ

	言葉や言葉群	頻度
水害に関するもの	暴れ川・洪水・水害	17
野洲川の恵みに関するもの	水資源・米どころ・水田	4
	魚とり・投網・アユ・魚がたくさんいた	18
	昆虫採集	2
	水泳・水遊び	9
野洲川とその周辺に関するもの	天井川・堤防・川原・三角州・旧と新の川	30
河川改修とその後の野洲川に関するもの	河川工事・治水	7
	いかだ下り	7
野洲川を形容するもの	大きい・のどか・きれいな水	11

### (3) 野洲川と共に

現在、野洲川には新しい放水路がつくられ、河川敷を利用したスポーツや放水路におけるいかだ下りなどのイベントが行なわれ、人びとと野洲川の新しいつきあひも始まっている。表3と表4をみると、このような新しい野洲川のイメージも少しずつ出てきていることがわかる。

これからも、これまでの生活の中における野洲川との幅ひろいかかわりを忘れず、新しい野洲川とのつきあひ方を考え、流域の人びとが野洲川と共にあゆんでいくことを願いたい。

### 文献・資料

朝日新聞（1953）9月23日朝刊、夕刊。24日朝刊、夕刊。25日朝刊、夕刊。26日号外。27日朝刊。28日朝刊。

10月7日朝刊。9日朝刊。13日朝刊。18日朝刊。

富田 正（1983）：偲。

守山市教育委員会（1974）：野洲川改修事業に伴う民俗資料調査報告。